

社会学 小辞典

増補版

朗 郎 弘
島 郁 晃
濱 内 川
竹 石 編

社会学小辞典

〔増補版〕

濱島 朗
竹内 郁郎 編
石川 晃弘

有斐閣双書 〈小辞典シリーズ〉

〈編者紹介〉

はま しま あきら
濱 島 朗 東京学芸大学教授
たけうち いく お
竹内 郁郎 東京大学教授
いし かわ あきひろ
石川 晃弘 中央大学教授



有斐閣双書 〈小辞典シリーズ〉

社会学小辞典 [増補版]

定価 2,400 円

昭和 52 年 6 月 30 日 初版 第 1 刷発行

昭和 57 年 8 月 20 日 増補版第 1 刷印刷

昭和 57 年 8 月 30 日 増補版第 1 刷発行

編 者

濱 島 朗
竹 内 郁 郎
石 川 晃 弘

発 行 者

江 草 忠 允

東京都千代田区神田神保町 2 ～17

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

電 話 東 京 (264) 1311 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本局支店 [115] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷・大日本法令印刷 製本・高陽堂

© 1982, 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替いたします。

内 部 交 流

ISBN 4-641-09856-5

S 71/21 (日 1-9/4)

社会学小辞典 増補版

(小辞典シリーズ)

GB000450

戦後の諸変革に続く十数年間は新生社会学のめざましい躍進の時期にあたり、多くの事実発見と理論的整備をもたらした。しかしこれとて、その後の十数年間、つまり1960年代から現在にいたる世界的規模での社会構造上・生活意識上の変化とその提起する理論上・実践上の諸問題、これに触発され対応をせまられて生じた社会学の諸分野における飛躍的な発展に比べれば、影のうすいものとなってしまったかのようである。高度成長から低成長への転換点にあって、経済万能から福祉優先へ、管理社会的抑圧からの人間性解放へとといった動きのなかで、社会学の第二の躍進が多くの人びとから期待されている。過去に蓄積された成果をふまえて、いかに現実に対処し、未来への展望を切り拓くかが、社会学の緊急の課題となり、この課題の解決をめぐるじつにさまざまな発想やアプローチが生まれ、多彩な理論と方法をもつ多様な諸潮流の生成をみるにいたった。

他の社会諸科学と同様、社会学の内部におけるこの多様な分化と専門化は、この道に志す多数の初学者だけでなく専門研究者にとってもその全貌を見きわめがたくし、他方で概念・理論・方法・技術の新たな総合への必要を生みだしている。いや社会学の内部ばかりではなしに、社会諸科学、とくに隣接諸科学との交流もますます盛んになり、相互の交錯・浸透の結果、個別科学のなわばりをこえた学際的アプローチが要請されるまでになっている。諸科学間での共有言語の形成、理論や方法の照合がこんにちほど要求される時代はない、といつてよいであろう。

この辞典は、社会学の内外における上記のような要請に応えるために作られた。そのため、社会学の広汎な諸分野における最近の発展とその成果をとりいれるだけにとどまらず、隣接する社会心理学や文化人類学の達成や数理統計上の技法はもちろん、さらにひろく社会学の研究に必要とされる関連諸科学（とりわけ行動科学・情報科学など）の専門用語・概念・技法を可能なかぎり収録して、社会学を中心とする関連諸科学の現在の達成水準をできるだけ正確に反映するように留意したつもりである。そのばあい、社会学関係を主体とする専門用語・概念を簡潔かつ明確に定義づけ、客観的に説明することを主なねらいとした。これによって初学者や一般の読書人の社会学にたいする理解を助け、また専門研究者にとっても知識の整理に役立つことができれば、编者としてこれ以上の幸せはない。

しかし、広汎多岐にわたる用語・概念を簡潔かつ適切に説明することは容易な

わざではない。とくに本辞典のように小項目主義に徹するばあい、水準を落とさずにコンパクトに分かりやすく説明をほどこすには、内容上も表現上もきびしい制約があり、舌足らずの感がないではない。この欠点を補うために、文末に関連項目との異同を検索できるようにするなど、できるかぎりの努力はしたつもりである。本辞典が、そうした制約にもかかわらず、簡略ながら必要最少限の適切な説明ができたとすれば、その功績はひとえに、無理な要求と制約の克服に取り組んでいただいた115人にのぼる執筆者各位の並々ならぬご努力に帰さねばならない。なお、巻末に一括した600近くの人名項目は、社会学史上の重要人物のほか、とくに現役で活躍中の新進気鋭の研究者の活動状況・研究業績が分かるように配慮した。これもまた本辞典の特色の一つである。

いうまでもなく、学問は日進月歩の勢いで発達する。今から20年ほど前に出た福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』(有斐閣, 1957)は、それまでの社会学の成果を集大成し、新しい発展の方向を示した点で画期的な役割を果たした。しかし、歳月の経過はこの辞典を現状にそぐわないものにし、社会学の学習や研究のうえに支障をきたしている。本書の上梓によって、この点をいささかなりともカバーできるならば、望外の幸せといわなければならない。終りに、本辞典の刊行に終始努力された編集部の平川幸雄、尼子文男の両氏にお礼を申し述べておきたい。

1977年4月

編者 濱島 朗 竹内郁郎
石川晃弘

増補版 はしがき

本辞典が世に出てから、はや5年の歳月が経過しようとしている。社会学の最新の達成を収めて斯学の学習に役立てようとした本書第1版も、5年ほどの間にいくらか老けこみ、若返りが必要になった。老化は必然の運命であり、若返りは完全には不可能であるが、いくらかでも学問発達の現状に適用ものになればと念じて、ここに増補版を刊行することになった。読者諸氏のご要望とご期待に応えられれば幸いである。

1982年4月

編者

執筆 者 (五十音順)

iii

本辞典利用の手引

本辞典の特色

(1) **小項目主義による待望久しい画期的な社会学小辞典** 近年、社会学は著しい発展をとげ、従来の概念や理論に加えて、多くの新しい概念・理論・技法が形成され、蓄積されてきました。しかし、これまで社会学全分野のこれらの用語を網羅し、かつ簡潔に説明した辞典類はありませんでした。本辞典は、現代の社会学で使われている概念・理論・技法を、社会学および社会学と関連の深い隣接諸科学の分野から、小項目主義の原則に立って精選・網羅し、総数約 4200 項目を収録した総合的かつ最新の社会学小辞典です。したがって、学生・研究者をはじめ社会学に関心をもつ一般の人たちまで極めて広範囲の読者層の要望にお応えできます。

(2) **事項約 3600 項目、人名約 600 項目** 項目は、①学説史・一般理論、②家族、③地域社会、④経営・労働、⑤教育、⑥社会心理・社会意識・文化、⑦マス・コミュニケーション、⑧政治・経済・法、⑨社会運動・社会変動、⑩社会病理・社会問題・社会福祉、⑪調査・測定、などの各部門から、全体の構成上のバランスを考慮しながら選定しました。隣接諸科学に関する項目は、社会学に関連の深いものにかぎり収録し、社会学固有の項目を最大限収録するようにしました。また、巻末にまとめた人名項目については、内外を問わず社会学の発展に影響を与えた人文・社会学者、および現在活躍中の外国の社会学者を可能なかぎり収録しました。

(3) **短い解説で正しい理解を与える知識の整理箱** 項目の記述に際しては、概念・理論・技法の定義を客観的にかつ簡潔に説明することを基本方針として、1 項目を 100 字から 600 字程度で、標準化された明快な表現で解説しました。読者には、正しい知識の理解と整理に役立つように心がけました。小項目主義の採用と充実した索引や関連項目の注記により、縦横にひき、理解し、活用できる辞典としました。とくに関連項目との異同を明らかにし、小項目主義の制約のなかで内容を充実することに留意しました。

(4) **和文索引・欧文索引つき** 社会学上の用語には、外来語が非常に多いため、項目には欧文をつけることを原則とし、解説文中ではその概念・理論・技法の提

唱者をできるかぎり記述しました。この記述方針を生かし、巻末には事項索引（和文と欧文）、人名索引（和文と欧文）の四つの索引をつけて検索の便を図りました。索引には、独立した項目だけでなく、小辞典という制約上、項目として立てていない準项目的な概念・理論・技法・人名も適宜掲げました。

凡 例

I 項目と配列

1) 項目は〈現代かなづかい〉により、五十音順に配列。

① 国語の長音は「ウ」で表し、その順序による。

② 外国語をかたかなで表す場合は、長音は長音符「ー」を用い、配列は長音符を無視した順序による。

③ 促音は「ッ」で表し、その順序による。

2) 項目名中に（ ）を使用した場合は、（ ）を無視して、その順序による。なお（ ）内を略した場合に配列の順序が異なるときは、別に〈見よ項目〉を立てた。

例 構造(的)成長(こうそうてきせいちよう)

構造成長 → 構造(的)成長

3) 複合的な項目は、「・」を無視して、その順序による。この場合も後出の事項を〈見よ項目〉として立てた。

例 正常・異常(せいじょういじよう)

異常 → 正常・異常

4) 外来語の項目は、原音主義を原則としてかたかな表記し、その順序による。

例 ヴォランティア(volunteer)

5) 外国語の略語の項目は、かたかな表記とせずにそのまま掲げ、4)の原則に従って配列した。

例 EP(イーピー)

6) 人名項目中、外国人のかたかな表記は4)によるが、姓(family name)を項目名とし、五十音順に配列した。同姓の場合は、名(personal(Christian))

name) のアルファベット順による。

Ⅱ 項目と外国語

- 1) 外来語の項目は()内に欧文をつけた。欧文は英語を重視する方法によったが、必要に応じて原語を入れた。
- 2) 注記のない欧文は英語で、ドイツ語、フランス語などの場合は、それぞれ「独」「仏」などと注記した。

Ⅲ 項目の記述

- 1) 〈現代かなづかい〉により、漢字の使用はなるべく当用漢字の範囲内に限るようにした。
- 2) 暦年は原則として西暦を用い、必要に応じて日本年号で記した。
- 3) アスタリスク(*)は、必要に応じて本文中の用語の右肩に付し、その用語が項目として収録されていることを示した。
- 4) 解説文末の関連項目の注記(一)は、その項目の上位概念・下位概念・並列概念など関連の深い項目を示す。
- 5) 文献を引用した場合には、『』で書名・雑誌名を、「」で論文名を表示し、()内に刊行年を表示した。なお、人名項目では主著を掲げるようにしたが、邦訳書の有無にかかわらず、表題はすべて日本語に訳して掲げた。
- 6) 文中での外国人名の表記は、項目として立ててある人名については原則として姓のみをかたかなで表示し、項目として立ててない人名については()内に姓と、名のイニシャルを欧文で表記した。
- 7) 人名項目の最初に国名を→印でつないだものは、その人の国籍の移動を示す。

Ⅳ 索引

索引については、索引の凡例を見よ。

ア

ISC (index of status characteristics)

地位特性指数と訳される。ウォーナーによって考案された社会経済的地位尺度*の一つで、個人ではなく世帯主に対して決定される。職業、所得の源泉、住居形態および居住地域のおおのを7段階に分け、ウェイトをつけて総合する。EP*の簡便尺度として用いられる。一階層区分、社会的地位

愛国心 (patriotism) 人間が所属する「くに」に対する愛情・忠誠・献身の態度。その場合の「くに」は、狭隘な部族共同体から広大な国民国家*にわたり、国土・国民*・伝統*など種々の内容を含み、元首・国旗・国歌などによって象徴される。それに応じて、愛国心も具体的・自然発生の愛情から抽象的・目的意識的な献身に至る多様な性格をもつが、自然発生的な家族愛や郷土愛とは本来異質のものであり、国家*などの意図的政策による等質化の結果、それらをのりこえたところに成立する。排外的なエスノセントリズム*への傾向を（特に非常事態の下で）帯びやすい。ナショナリズム*と混同されることもある。

アイテム・アナリシス 一項目分析

アイデンティティ (identity) エリクソンの精神分析的自我心理学における中心概念の一つ。同一性または自己同一性と訳されることが多い。客観的には人格*（ときには集団や共同体）の統合性と一貫性を示す概念。主観的には自分がほかならぬ自分であるという確信ないし感覚をいうが、それは同時に、自分の不変性 (sameness) と連続性 (continuity) を周囲の他者も認めているという確信・感覚に裏づけられている。内的なまとまりと社会とのつながりという二重の意味を含むこの感覚が失われると（アイデンティティの喪失）、人は「根こぎ感」にとらわれ、自分が何であ

るのかはつきりわからなくなり、生き生きとした存在感をもなくなる（アイデンティティの危機）。個人のライフ・サイクル*の面から見ると、青年期がこの危機の時期に当たる。青年*は、幼児期以来のさまざまな同一化*を、新しい（人物ないしイデオロギーとの）同一化と結びつけながら、自分なりにまどめ直す自我統合の過程を通して、この「危機」をのりこえ、アイデンティティを確立していかなければならない。なお、現代においては、社会構造の複雑化、集団の解体、価値の多元化などによるアノミー*状況が一般化し、アイデンティティの拡散やアイデンティティの統合（地位の不整合に伴う）が深刻化している。アイデンティティの危機は、青年世代に限らず広く年長世代にまで及ぶ一般的な現象となってきている。一帰属意識、役割取得、役割葛藤、人格の分裂

アイとミー (I and me) G.H. ミードの用語。meは他者の態度*を内面化*し、他者が自分に期待している役割*を取り入れることによって形成される自我 (self) の社会的側面。Iは個人の内発的反応、自我はこの2側面（社会的な期待どおりに行動しようとする社会人としての側面と、これに対して独自の反応を示し、型どおりの行動に何らかの個性的な修正を加え、ひいては社会のあり方に変化をもたらそうとする個人としての側面）の対話ないし相互作用の過程として把握される。→自我、超自我、社会化

アウトグループ 一内集団・外集団

アウトサイダー (outsider) 一般に局外者の意。経済的には、カルテルに加盟せず、その統制外にあって競争的立場をとる企業をいう。社会学的には、特定の集団・組織・社会（時代）の規範秩序や支配的価値体系*に順応しえず、局外者の立場に身をおく者をいう。彼らは、一般成員（インサイダー）からは異端視され、逸脱*者とみなされがちであるが、反面、既成の一般の秩序や価値観*にとらわれない鋭い批判力や文化的創造力を示す場合も少なくない。→マージナル・マン

アクション・リサーチ (action research) グループ・ダイナミックス*の技法に端を発し、

ある目的に向かって集団活動を誘導するために、現場の実務家と研究者とが協力して、集団活動の具体的展開過程を観察・記録・分析し、それに基づく知見（診断）をフィード・バックして、集団の生産性・向上などその問題解決ないしは変革を図る社会工学的研究。集団内の人間関係の改善、集団活動の生産性の向上、集団間の軋轢の解消など、集団過程*に介入してその変革・改善をめざす点で、実践的性格の強い教育訓練・管理の一技法でもある。

アコモデーション 一応化

アジアの生産様式（独 asiatische Produktionsweise）経済的社会構成体*の一発展段階に特有な生産様式*で、本源的所有*に基づく原始共同体*的・前階級的生産様式をいう。この段階では、宅地・庭畑地といった囲い込み地（ヘレディウム）は見られるが、家族による私的土地所有はなく、種族団体による共同体*的占取を特色とする。ただし、オリエント以東のアジア地域における灌溉農業と大規模な土木事業の必要から、諸共同体（農工・未分離の自足体）の枠を超えた統合的統一体が最高の土地所有者として現れる。アジアの生産様式は、マルクスによれば、一方では古典古代的・封建的・近代ブルジョア的生産様式に先行するが、他方では資本主義的生産に先行する本源的所有の3形態（アジア的・ローマ的・ゲルマン的共同体）を通じて見られる共同体的生産様式である。この種の生産様式を階級的社會構成とみるか否かをめぐって、これまで国際的規模での論争が行われたが、奴隷制社会*の原初形態とみなす従来の支配的見解に代わって、原始共同体的・前階級的生産様式とみなす見解が有力になっている。

アジア的専制（独 asiatischer Despotismus）アジアの生産様式*の上部構造*。ここでは、灌溉・治水の必要から、互いに孤立的・排他的な種族共同体（土地の直接的所有主体）の枠を超えた最高統一（専制国家）とその首長（専制君主）が、あたかも全国土と人民を支配する唯一・最高の所有者として現れ、共同体*とその成員は無所有・無権利のままその支配下に人格的に隷属するかのよ

うに觀念される。そこから、いわゆる「東洋の専制主義」（マルクス）の原型が生まれる。一奴隷制社会

アジア的停滞性 アジアの形態の共同体*成員が、私的所有*と人格的自立をもちとっていったところでは、本源的所有*から第二次的所有への移行は、ギリシア・ローマの場合には労働奴隷制として現れるが、アジアにあっては共同体成員は専制君主の奴隷となり、国家奴隷制という形でアジア的専制*国家が存続し、全共同体成員の剰余生産物を収奪し、政治的権力を剝奪するため、拡大再生産への途が妨げられ、アジアの形態の下での労働様式や風俗習慣が頑固に長く維持され、アジア的停滞をもたらす。一社会的停滞

足入婚 結婚後の一定期間、婚舎を妻方におき、夫は妻の居所に通うが、後に夫方に移動しそこに定住するという、婿入婚から嫁入婚への移行過程における婚姻*様式。その期間は地域によってさまざまであるが、婚礼は婚姻成立時と夫方への移動時の2回にわたって夫方で行われるのがふつうである。なお、農繁期など繁忙時に、内縁関係にある夫の家に働きに行くことを条件とする試験婚の様式を足入れと呼ぶところもある。

アジテーター（agitator）ブレハーフは宣伝*と煽動*とを区別し、一つのことを多数の人間に教えこむ活動を煽動と呼んだ。この煽動を任務とするのがアジテーターで、ソ連では「アギタートル」と呼ばれ、政治的・社会的目標へ向けて大衆を動員する役割を担っている。一オルガナイザー

アスクライブド・ステイタス 一生得的地位

アスクリプション（ascription）行為者が、ある状況で社会的対象（人）に対して、それが何をなしうるかまたは何をなしえたかという見地からではなく、それが現に何であるか（性別・年齢・家柄・身分などの生得的地位*やそれの有する属性）という視角から対処する志向の型をいう。属性原理と訳される。業績の反対概念で、社会的配置を規制する原理の一つでもある。パーソンズらの行為理論では、アチーブメント＝アスクリプションとい

う形で、一つのパターン変数*を構成する。それは、営為主義=資質主義の対比を示す。一業績

アソシエーション (association) 集団*類型の一つ。マッキンヴァーが『コミュニティ』(1917)のなかで初めて設定した概念が著名。特定の類似した関心や目的をもつ人びとが、それらを達成するために意識的に結合し形成する自由な人為的集団のこと。結社(ときには機能集団*、派生集団*)と訳されることがある。コミュニティの共同生活を可能にするために、特定の限定された機能の遂行を目的として組織され、共同生活のなかから派生してくる集団を意味するから、アソシエーションはコミュニティの機関 (agencies) である。具体的には、家族・遊戯集団・学校・教会・営利団体・官庁・政党・組合・国家などである。ただし家族と国家は特異であって、コミュニティの要素も含む限界的ケースとされる。社会の発展によってコミュニティが拡大・開放されるとともに、アソシエーションの多元化・巨大化・合理化が進み、多国籍企業や国際連合のような国際的規模のものが発達する。マッキンヴァーは、かかる状態を社会進化の高度段階と呼んだ。なおマルクス主義社会学でいう「アソシアーツィア」は、生産者の同志的連帯に基づく全人格的な集団とされている。→コミュニティ、自発的結社

遊び (play 独 Spiel 仏 jeu) 外的・実質的な目的への従属を離れて、ただ楽しみのために、それ自体を目的として自発的に(他からの強制なしに)行われる活動をいう。その点で、将来達成されるべき目的のための手段、必要悪または苦しみとしての労働*(仕事)とは区別される。遊びを人間の本质とみなし、したがってまた文化*の根源と考えたのはホイジンハであるが、これを受け継ぎながらカイヨワは遊びの類型論を發展させ、「競争」「偶然」「模倣」「めまい」という四つの基本型を区別した。これらのうち、前二者を「脱所属」の遊び、後二者を「脱自我」の遊びとして捉える再解釈(作田啓一)もある。功用原則や現実原理*に支配される 実際生活(適応行動*)の平面を離脱した仮構的な領域

として、また功利的配慮からも道徳的義務(当為)の要請からも自由な活動として、遊びが人間および社会にとってもつ意味は重要である。実利(まじめ)と遊びの未分化な子どもにとって、遊びは同時に学習・労働であり、自我*の形成(社会化*)に重要な役割を果たす。また、豊かな社会*の出現によって、仕事や家事から解放される傾向が強まり、遊びへの志向が社会構造*や価値観*の変化を逆に促進する面も無視できない。→遊戯集団、快楽原理、聖と俗、レジャー、ホモ・ルーデンス

遊び仲間 一遊戯集団

新しい産業国家 (new industrial state) 現代の経済体制に対してガルブレイスが下した定義。産業の高度化に伴い競争要因が価格から科学・技術に移行し、市場の不確定性は需要の計画化に席を譲る。このための意思決定*は個人ではなくテクノストラクチャー*という専門家集団によってなされる。→高度産業社会、国家独占資本主義

新しい労働者階級 (la nouvelle classe ouvrière) 先進産業部門において経営機構に深く統合*されながらも、相対的に自律的で技術的・知的水準が高い科学・技術労働*者層。フランスの労働社会学者たちは、この層の意識や運動形態が尖端的で、トータルな人間的欲求に発する異議申立て*、自主管理*への要求など、ラディカルな体制変革*を志向することに注目した。→プロレタリアート

アチーブメント 一業績

アチーブメント・モチヴィ (achievement motive) 達成動機と訳される。困難を克服して、目標をなし遂げようとする社会的動機。マックレランドによって測定方法が開発され、この動機が個人の行動を規定する重要な要因であることが明らかにされている。また社会の経済的繁栄に先行して、成員の高い達成動機が存在しているという仮説が立てられている。一業績志向、動機、親和的動機

圧力団体 (pressure group) 自己の集団*の追求する特定利益の達成のために政策決定過程に圧力行使する集団ないしそのために

組織化された利益団体。しかしその際、圧力団体は、政党*とは異なり、政策決定に影響を与えても、その結果生じる政治的な責任は負わず、また選挙で公職を争うことはしない。その主要なものとしては企業家団体・労働組合・同業組合・宗教団体・在郷軍人会などが挙げられる。日本では経団連・総評・医師会・農協などがこれに当たる。近年、圧力団体が台頭してきた要因としては、1)社会的諸利害の複雑な分化とその規模の拡大、2)政府、行政機能の増大、3)政党の代表性機能の狭小化、4)政党の寡頭制*化などを挙げることができる。 —インタレスト・グループ

アドミニストレーション(administration) 社会事業*における施設管理を意味する。具体的な社会事業サービスに政策を移し替える過程と、その過程で得られた知見を政策そのものの修正・変更に役立てる過程という二つの側面を含む。社会事業の理論と方法は当初、企業利潤と生産性向上に主眼をおいた科学的管理法*や人間関係*に代表される、人員・物資の最少の支出による効率的事業の概念に裏打ちされて、施設管理を社会事業の理念や目的から独立した技術過程として把握する傾向にあった。この点で、これと同じ用語が行政学や政治学において効率以外の価値を副次的・条件的にしか捉えない、行政の管理的作用の意味で使われてきた経緯と軌を一にする。しかし、現代の福祉国家*・行政国家*の段階において、完全雇用*と社会福祉*をコアにした計画・政策が公行政の主導の下に立案・施行される度合いが高まり、その影響範囲と内容が福祉・労働・保健などの分野にまで及ぶに至って、施設管理のあり方も、かかる公行政の価値理念との関係で根本的な再検討を迫られている。 —経営、経営管理

アナキズム(anarchism) 無政府主義。国家*ないし政府は望ましい社会の成立にとって無用であるばかりか有害であるとする主張。国家ないし政府は人を敵対と分裂に導くものとし、人が相互にもつ互愛の情や扶助の能力を前提として、社会問題*の解決は自発的な社会形成にあるとする。私有制の批判、公有制の賛賞を伴うことが多い。新社会の建

設を別天地に求めようとするユートピア*志向のもの、ブルードンのように労働者連合によって産業社会*を再構成しようとするもの、クロボトキンのように農村の相互扶助の再建を考えるもの、バクーニンのように国家の暴力的転覆をめざすものと、さまざまな主張に分かれる。社会改革*を政党ないし中央集権的組織の形成によって行うことを拒否することが多い。革命的サンディカリズム*などの労働運動・社会運動のほか、文学・美学への影響も大きい。テロリズム*としばしば同一視されるが、一般にはテロル(仏terreur)や暴力*の行使に批判的である。

アニミズム(animism) 霊的存在に対する信仰をいう。生きた人間には靈魂が、肉体の死後には死霊が、動植物など自然の事物には精霊といったような、それぞれの持主の人格性を備えた人格霊の信仰であり、超自然観の一種である。 —原始宗教

アノミー(仏anomie) 社会的規範*の動揺・弛緩・崩壊など社会解体*によって生じる行為*や欲求*の無規制状態。語源的には、「無法律状態」などを意味するギリシア語に由来するが、デュルケムによって社会学的概念として定式化された。彼は『自殺論』(1897)のなかで、経済危機のような急激な社会生活条件の変化によって生じる欲求=価値体系*の攪乱状態に注目し、これを自殺*の社会的条件の一つとして記述した(アノミー的自殺)。アノミーは、その原因論からいえば、主として産業化*の進展による、1)伝統的規範秩序の崩壊、2)欲求の急速な充進、に起因するが、その社会心理的帰結としては、価値の葛藤、行為の目標の喪失などが指摘され、それらは、現代における人間疎外*の若干の側面に関連をもっている。アノミーの社会学的概念としての具体化の試みは種々あるが、マートン、デ・グレージアらのそれがよく知られている。なお、個人次元の心理的アノミーを社会次元にひき移して社会的アノミーといふことがある。 —単純アノミー、急性アノミー

アノミー尺度(anomie scale) アノミー*を社会心理的な態度の特徴として、経験的調

査によって把握するための尺度*。スロール (Srole, L.) による尺度化* (eunomia-anomia scale) の試みが最も有名で、これは次の5項目からなっている。1) 社会の指導者が個人の欲求に無関心であるという知覚、2) 予測不可能な無秩序な社会では何事も成熟しえないという知覚、3) 生活目標の後退の知覚、4) 無力感、5) 仲間から社会心理的支援を期待できないという確信。

アバンシー 一政治的無関心

アーバニズム (urbanism) ワースによる古典的な規定は「都市*に特徴的な生活様式*」というものである。このアーバニズムは人口量が大きく、密度が高く、社会的に異質の人びとの集落としての都市から生ずるとされ、人間生態学・社会組織・社会心理学の三つの側面から捉えられる。それは主として、1) 空間的隔離*、社会移動*、2) 家族*の社会的意義の減少、親族や近隣*の結合の弱化、自発的集団の統出、身分的階級制度の崩壊、ホワイトカラーの増大、3) 無関心の態度、精神分裂的性格、主体性の喪失、相対的な思考様式や寛容の態度、などの仮説によって具体的に示される。総じて、ワースはアーバニズムによって第二次的接触を強調したといつてよい。しかし、このアーバニズムの仮説は実証的ないし理論的な批判・修正を受け今日に至っている。すなわち、第二次的接触の過度の強調が指摘されると同時に第一次的接触の存続が指摘されるようになっている。→都市化

アーバン・エクソドス (urban exodus)

経済的には、農村工業が発展しつつあった17世紀のイギリスにおいて、旧都市の手工業者・小親方層が営業の自由を求めて封鎖的な都市のギルドを離れ、生産力の高い農村部に脱出してきた、という歴史事実。転じて思想的には、既存の特権的な都市文化・思想から、新しい批判的な知識人が、非特権的な地域・場所・空間を根拠地として、既存の体制 (エスタブリッシュメント*) を包圍し、解体させるような思想・文化・宗教の運動。

→周辺革命論、離村向都現象

アーバン・スプロール (urban sprawling)

→スプロール現象

アーバン・パーソナリティ (urban personality) 都市化*された社会において形成されるとみなされる特徴的なパーソナリティ*。ルーラル・パーソナリティ (rural personality) の対立概念。しばしばアーバニズムと同義。例えば、標準主義・ステレオタイプ*・個人主義*・コスモポリタニズム*・社会的孤立*・不安定性などによって示される。→アーバニズム、都市の人間関係

アピール (appeal) 説得コミュニケーション*のメッセージ* (刺激内容) が、被説得者に対して、その説得内容を受け入れるように動機づける作用力をいう。被説得者の心理に訴えて、潜在的な欲求や願望を顕在化させて、説得者の意図を実現する。情緒的アピールと合理的アピール、積極的アピールと消極的アピールなどに分類され、その有効性の比較が研究されてきた。特に恐怖*を呼び起こすアピールの効果の研究が有名である。

→アジテーター、宣伝

アブセンティズム (absenteeism) 労働争議*の一形態としての欠勤サボタージュ*。産業における闘争の包括的分類はコーンハウザー、ロス (Ross, A. M.) らによって与えられているが、アブセンティズムは、高率の労働移動*などとともに、労働者の個人的、非組織的な抗議闘争の形態であり、組織的争議の機能的代替物である。ノウルズ (Knowles, K. C. G.) は、「ストライキ*の損失が多いときには欠勤サボの損失は少く、逆も真」であるとして、これを統計的に立証している。

アフターコーディング・プリコーディング (aftercoding - precoding) コーディング*を現地調査*の終了後に行うことをアフターコーディング、現地調査に先立って行うことをプリコーディングという。自由回答法*では前者が行われ、それ以外の回答法では後者が行われることが多い。

アプローチ (approach) 研究主体が問題として選びとった社会現象にどのように接近していくか、その研究方法ないし研究態度を、指し示す用語である。主体の側の認識意欲のありよう、問題設定、分析枠組とその基礎概

念、調査研究法などが、その内容として包みこまれている。一問題意識、概念図式、概念枠組

アベラント行動 (aberrant behavior) マーティンによる、逸脱行動*の二つのカテゴリーの一つ。彼は逸脱行動をアベラントと非同調*とに区別した。アベラント行動とは、規則には違反するが、それを改変しようとはせず、うまくぐり抜けるような行動で、ふつうの「犯罪者」の大部分は、このカテゴリーに入る。

アポロ型文化・ディオニソス型文化 (Apollonian culture-Dionysian culture) ニーチェ (Nietzsche, F. W.) の用語。アポロ型文化は禁欲的な目的意識に基づく権力志向の行為に根ざし、これに対して、ディオニソス型文化は欲求解放の美意識を中心として、人格と人格の触れ合いの関係に志向する。アメリカの文化人類学者ベネディクトは、このような社会的性格*の対比に着目して、後者の文化*を示すものとしてクワキウトル族を、前者の文化を示すものとしてズ=族を取り上げ、文化様式*の分析のキー概念とした。

甘え 土居健郎が日本語独自の語彙として抽出分析した概念。日本人の対人関係*における依存願望を指す。しかし木村波は、一体化を求める愛情欲求ではなく、既存の一体化を前提にして、勝手気儘をすることであるとする。一同一化

網元 = 網子 網元は、網や船を所有する漁業経営者であり、網子は網元に従属し漁業労働に従事する。両者の関係は多分に身分的である。労働組織におけるオヤ・コ関係 (親方 = 子方) の典型を示すものから、比較的自由な契約によるものが見られる。一親分 = 子分関係

アミューズメント・センター 一盛り場

アルター (alter 独 Alter) 他者、他我など訳される。継続的な相互行為*過程におけるある所定の時点での能動的な行為主体 (行為の送り手) を自我と呼び、その時点での受動的な行為客体 (行為の受け手) を他者と呼ぶ。一自我

アンケート法 (enquête method) 調査対

象者を当該の問題に詳しい専門家に限定して、調査票*による調査を行う方法。元来、統計的調査の補助的役割を果たすものとして用いられてきたが、現在では新聞・雑誌などが少人数を対象に意見を聞く場合に多く用いられている。簡便ではあるが、社会調査*としてはあくまで補助的なものであって、正確なデータを収集する方法としては不適当である。一質問紙法

暗示 (suggestion) 言葉やその他のシンボルを通じて伝達された命題を、論理的に十分な根拠がなくても無批判に受け入れて、それに反応する心理過程。また、そうした心理過程をひき起こす企てや刺激を指すこともある (「暗示にかける」「暗示を与える」などの用例)。一般に批判感覚が減退した場合に暗示現象が生じやすい。催眠*状態にあるとき、突発事件に遭遇したとき、群集*の一員になったとき、偏見*が顕在化したときなどが、その典型である。一威光暗示、間違い暗示

アンシュタルト (独 Anstalt) M. ヴェーバーによれば、合理的に制定された法的秩序を伴う団体*のうち、結社*のようにこの制定秩序が自発的集団参加者に対してのみ適用されるのとは異なり、一定領域内の一定指標 (出生や居住など) を満たすすべての行為者の行為に対して、それが強制的に適用される国家や教会などの団体をいう。一自発的結社

アンダードッグ効果 (underdog effect) 説得コミュニケーション*や投票行動*の予測後などにおいて、大衆*が優勢なほうに同調*するのではなく、劣勢なほうに味方して行動 (例えば投票) する場合に、この種の効果が認められる。一バンドワゴン効果

安定性 (stability) 安定均衡ともいう。システム*の均衡状態と不可分に関連した概念であり、日常用語としての意味よりも厳密な定義が与えられている。すなわち、システムを構成している変数群とそれらの相互連関関係の様式を表すシステム構造が与えられるとシステムの均衡状態が定まるが、その際、構造*が変わらないという前提の下で、一つま

たはそれ以上の変数の値が均衡値から乖離したとき、他の変数と相互連関を繰り返した後、再びもとのあるいは新しい均衡状態に達することを安定性という。→フィードバック

アンビヴァレンス (ambivalence) 両面感情、両面価値などと訳されるが定訳はない。同一の人間が同一の対象に対して同時に相反する感情をもつこと (例えば父親に対する愛と憎しみの併存)。フロイトはこれを人間の感情*の本来の性質としており、人間の行動の動機*を理解するうえで極めて重要な概念の一つである。精神分裂病者の場合、このような両面性が表面に現れて、矛盾した言動が繰り返されたり、両側面が相殺しあう結果、意思決定*ができなくなる例がみられる。一般には一方の側面が意識下に抑圧*され、夢のなかなどに変装した形でのみ現れるのが通例であるが、本人も気づかない形で抑圧された感情が社会的行動に影響を及ぼす場合も多い。→コンフリクト、自我分離

イ

委員会の論理 中井正一が、1936年、同人誌『世界文化』掲載の同名の論文で展開した組織論*。古代以来のさまざまな論理を総合することによって、現代社会の現実に対応すべき新しい組織の論理、集団的主体性の論理として委員会の論理が提起されている。

いえ (家) 家は、家産に基づき家業を経営し、家計*を共にし、家の先祖を祀り、家政の単位となる、また家連合*の単位となる集団であって、日本における生活を規制する特殊な諸制度・諸慣習の体系である。家の構成員には、家系譜の連続を担い家権威の中心的地位にある家長*と、家長自身の属する家族* (系譜家族*または直系家族*と呼ぶ) を中核とし、さらに男女の住込使用人その他の人びとが含まれることもある。家長の家族には、

家の世代的連続を担う嫡系成員と、そうでない傍系成員に分かれる。家成員間におけるこうした身分の区別は、家の系譜*の超世代的連続が家の最高の目標であることに由来する。家成員はそれぞれの地位・役割において禁欲的にこの家の至上目標を優先させ、その実現に向かって奉仕し、同時に、家の生活保障*機能のいっその充実を期待する。家のこうした性格は、時代によって、また地域や階層によって異なった特徴を現出していることに注意しなければならない。→家制度、家族主義

家意識 家*生活における最高の目標は、家の系譜*の永続的繁栄である。家長*をはじめ家の成員は、個人の幸福、親子・夫婦の関係さえも、この家の目標と相容れないときは犠牲にされる。このように家の目標をすべてに優先させる意識、つまり家意識が家成員に共通に形成されていて彼らの行為を強く規制する。この家意識は、家が変化し、その再統合を必要とするとき、しばしば一つのイデオロギー*として自覚され、規範的な体系化がみられる。→家族主義

家共同体 (独 Hausgemeinschaft) 血縁・非血縁成員の人格的な恭順*関係に基づく結合、運命の共同を伴う、持続的な共産制の生活共同体*である。また、氏族や地縁共同体など団体形成の基礎となる。ヨーロッパ古代・中世の原始的家共同体、家父長制*の家共同体がその典型を示す。→共同体

家制度 家*を基礎的な構成単位として重視する社会において、法律や道德、宗教なども絡み合い、家を構成単位とする各種団体 (家連合*その他) や、社会全体の体系に存在する家に関する諸制度*・諸慣習*の体系を指す。この家生活に関する諸規範のなから、特に法律的部分を取り出せばそれは法的家制度である。これらの普遍的な家制度に対して、個別の家に具体的に対応する部分ごとにみられる規範の小体系を家制度体と呼ぶ。→家族制度

家元制度 日本の伝統的芸能 (華道・茶道・舞踊・能楽・邦楽など) における流派の組織を指している。特定の芸の流祖の血統を

縫ぎ、芸の免許権や流儀の決定権を独占する家元の下で、師匠＝門弟の主従関係の連鎖でもってヒエラルヒー・的に構成された集団である。そこでは家制度*が擬制され、師弟は親子とみなされる。芸能界に限らず、日本の企業・政党・官庁・宗派などは、家元制度にのっとった原組織をもつ、という見解もある。

家連合 個々の家*が、生活保障*の機能を発揮し、永続的繁栄という家の目標を遂行していくためには、単独では困難なことが多い。そのために他の家々と結びつき、相互補完的な関係をつくり出しているのが家連合である。その結合（連合）の仕方には二つの形態がある。その一つは家の上・下的（主従的）な家格*の家どうしの結合であり、他は対等的な家相互の結合である。その典型は、家の本末的系譜における本家と分家の結合（同族*団）と、各種の組*結合である。→本家＝分家関係

遺棄 (desertion) 扶養責任をもつ者が、自活能力を欠き保護を要する近親者を放置し、その生命・身体を危険にさらすこと。子捨てのように要保護者を路上などに放置する形態と、要保護者を家庭に残して保護者が家出する形態とがある。老人・幼児・不具者・病人などを遺棄した場合は、刑法の遺棄罪に問われることがあり、配偶者や養子を悪意で遺棄した場合には、離婚*や養子離縁の原因とされる。扶養意識の衰退、生活の困窮化、家族葛藤などが原因となることが多い。

生きがい 人は、日常の仕事や生活のなかで、自己の存在や活動の意義・価値を問い求め、生き働き続けることの意味を確認・再発見せずにはいられない。このような生活における「はりあい」の意識をいう。つまり生活に統括的目標を設定することによって、生活行為体系の主体的福祉を増進させる意識形態である。その基本特性は、1)生活目標達成への努力過程で生まれる（過程性）、2)実利を伴わなくてもよい即言的関心事（表出性）、3)生活行為の対象自体（母親にとっての幼子など）に転化しうる（主体客体の融合性）、4)目標達成*が困難なほど生きがい感が大きい（価値性）、5)社会的欲求の平常的充足の

場（職場・家庭など）で抱かれる（日常性*）、などである。→自己実現、アイデンティティ、満足感

生きた法 (das lebendes Recht) エールリッヒの法社会学*に特有の概念。各社会集団の内部で現実を受容され非公式サンクション*に支えられて、一般的に順守されている社会規範*を指す。全社会的な効力を形式的に有し、強制される実定法規範に對置される。→一法

生きた労働・死んだ労働 (das lebendige Arbeit - tote Arbeit) マルクス主義*理論における用語。使用価値としての生きた労働に対し、交換価値としての対象化された労働を死んだ労働という。死んだ労働とはつまり、資本や生産手段*に転置された過去の労働のこと。生産過程*（労働過程*）では労働・労働対象・労働手段*という三つの契機によって生産物が実現されるが、資本主義的生産にあってはこの2種の労働の交換に基づき、等価物の伴わない他人の労働の領有*をもたらし。なぜなら、資本家が購入した生きた労働は、過去の労働が転置されている労働手段に結合されることによって、死んだ（労働の転化した）資本による生きた労働の収奪・支配・領有を実現するからである。

異議申立て (die contestation) 1968年5月のバリ大学を中心とする学生運動の高まり（いわゆる「五月革命」）のなかで広く用いられるようになった言葉。単に大学制度に対する抗議にとどまらず、それを支えている現体制、さらにはその体制秩序に従属している文化や精神のあり方全体への根本的抗議ないし否認を意味する。→学生運動、反体制運動、ラディカリズム

異居近親関係 (kin family network) 家族周期*の後期の段階においては、両親の巣から独立して新しい家族をつくる子どもたちと親との新しい関係が生じる。この異居の親子関係*を中心に、兄弟姉妹、伯叔父・母と甥姪、祖父母と孫の家族との関係をも含む、生計と生活の場を異にする近親間の人間関係を指す。→変形拡張(大)家族

異居親族 (kin family) 人は、通常、一